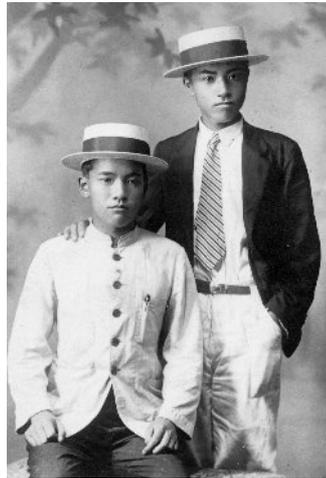
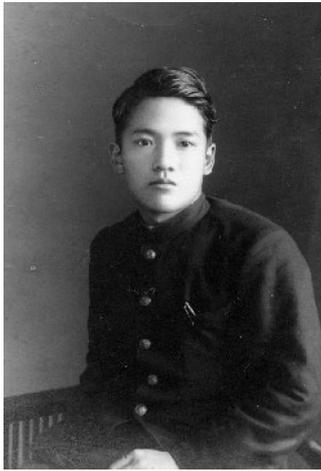


父方の祖母（つね；常？）には、実はあまり良い印象が無い。年の離れた末っ子の和夫さんが可愛く、父っ子だった正吉はあまり目を掛けてもらわなかったということもあるかもしれないし、第一、私の母・弥寿子との折り合いが悪かった。他人には優しいが、嫁には厳しいという典型であったようだ。しかし、当時の習いとはいえ、姉の没後、何人かの先妻の子供をかかえ、商店のおかみさんを兼任しなくてはならない羽目に突如追い込まれてしまった境遇には多に同情の余地がある。まして、伊之助の代で家業を急拡大し、築き上げた家であるから、食物も質素で、全てに始末な家計であったというのは想像に難くない。伊勢の河崎で味噌（醤油）屋さんを営んでいた家から来たという祖母がどんなに悲しんだか、今なら私も判るのであるが、私が豊川町の祖母の家へ寄った時、正直、早く母の実家に行きたかったことをありありと覚えている。お菓子も出なかったなあ……天理教を經由して晩年にはキリスト教に改宗し、天国に召されたのであるが、そんなこともあって、どうもなじめない祖母だった。



父の学生時代

曾祖父が起こした家業は長男の七太郎（ひちやん）が継いだ。私の幼い頃はまだ店があったが、あまり繁盛している風には見えなかった。（ちなみに、現在店の在った場所は取り壊されて駐車場になっているらしい。）父は早くから模型工作等に才能を発揮し、ロープウェイの模型を作って学校祭で褒められたこと、そのモーターも全部自作だったことを私によく話してくれたものだ。たしかに、大正13～5年頃の状況を思い描くと、父の自慢も理由のあることが判る。祖父は長男と父とが力を合わせて店の経営に当たって欲しいと願ったようであるが、飛行機屋になりたいとの思いは、家の風呂焚きを手伝いながら強くなっていった。ちなみにリンドバーグが大西洋横断飛行を成功させたのが1927年（昭和2年）の5月であるから14才の父には大変な刺激であったらう。

神戸の高等専門学校（現在の神戸大学工学部の前身）を受験したのは、当時の大恐慌の最中、日本で最も就職率の高い学校であったのがその理由と聞く。食べられないことが当時の日本の最大の恐怖であったことが判る。余談であるが、この恐怖がやがて日本が第二次世界大戦に巻き込まれる最大の理由となる。（米国議会におけるマッカーサー証言にこの点がはっきりと示されている）

最初の入学試験で、父は最終段階で身体検査に引っ掛かって落ちてしまう。京都で予備校に通いながら、再度受験を試みる時に、兄（七太郎）は神戸高等専門学校の先生だった中西さんの親戚ということで母方の祖父に口利きを頼んだ。（ちなみに父と母の生家は、ほんの20m程しか離れていないのであるが、9歳年が離れているため、結婚話が出るまではお互いに面識が無かったとのことである。このご縁が後で利いてくる。）

二度目の入試で数学は満点をとった父であるが、又もや身体検査で落ちては敵わないということであったのだろう。京都での下宿生活における食生活が良かったらしく、幸いにして二度目は合格した。晴れて学生さんとなった父は、仕送りを受けながら、学校に放置してあったグライダーを組上げて校庭で飛ばしたり、当時の最新鋭蒸気機関車C - 53に機関車実習で乗り込んだり、川西の飛行艇を見に行ったりと、それなりに学生生活を楽しんだようだ。

このころ既に名古屋で成功した「海苔屋の叔父さん」に援助を受けていたためか、実家からの仕送りが十分だったせいか、アルバイトをして云々の話は聞いたことも無く、猛勉強を続けた父は主席で機械科を卒業した。昭和9年のことである。卒業論文はグライダーの設計だった。後日、父の設計したグライダーが(昭和10年)空を飛んだ。『父が種を撒いた』と書かれた飛行中のグライダーの写真が今でも残されている。



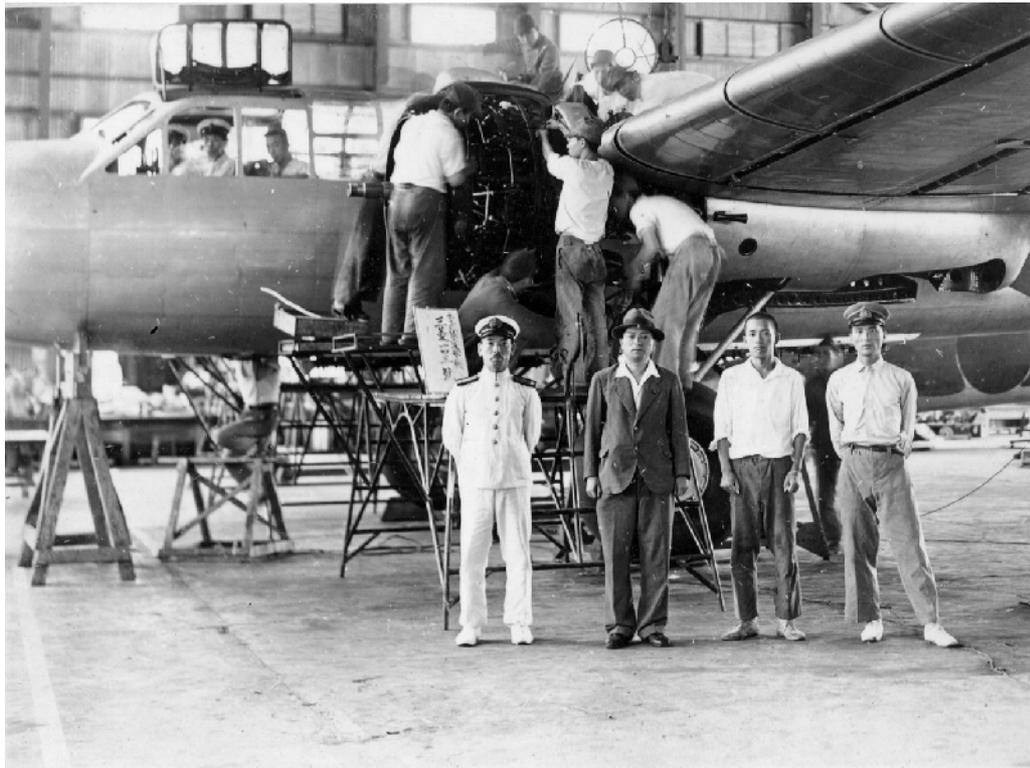
父が卒業時設計した図面により作られたグライダー

当時、神戸高等工業の機械科の首席は日立製作所に就職することが決まっていたそうであるが、飛行機をやりたい父は先生の推薦を蹴って昭和9年、海軍の航空本部技術課(霞ヶ関)へ就職した。民間人として就職した父であったが、やがて中国での戦火が広がりを見せたため、昭和14年、技術将校となる道を選んだ。大嫌いだった軍人になってしまった訳である。先生である中西さんが、最初海軍に入り、辞めて先生となったのとは逆。しかし、これは「陸軍に徴兵されてはかなわん」というのが正直な話であろう。



恩師であり、仲人でもあった中西 雄教授と夫人で弥寿子の伯母・喜美さん(中央)

父の最大の誇りは、航空本部へ勤務していた時に97式艦上攻撃機の要求仕様を纏め上げたことであり、その97艦功の試作に当たっての三菱社のやり方に腹を立てたことが父を三菱嫌いにさせたのであるが、その後、父は佐世保の海軍工廠付きとなり、太平洋戦争勃発時には97式大型飛行艇に乗って遠くトラック諸島に赴任していた。真珠湾攻撃がもし失敗していたら、米軍の反攻で生きては居なかつたろうというのは、父の口から何度も聞かされた話である。そして帰国後結婚し、追浜、富山、金澤と、各地で監督官を勤め、海軍技術大尉で終戦を迎えている。



昭和14年 佐世保工廠 飛行機部 鹿屋工場 吉岡技師と共に バックは96式陸攻



昭和17年10月27日 サイパン アスリート基地

2. 母と実家のこと

絵に描いたような老人だった父方の祖母に対して、母・弥寿子（やすこ）方の祖母は（当時）まだ若く元気で、多いに可愛がってもらった。店（丸與；「まるよ」と号したパン製造・販売業）も多くの職人を抱えた、羽振りのよい最中であつたのである。祖父は店の奥から何時も怖い顔で睨んでいたので、我々は汽車を降りて徒歩で店につくと、まずはこの怖い爺ちゃんと目を合わせないようにこっそり奥へ入り込んだものだ。このことは昨日のこのように覚えている。そこでは多くの人が威勢良く働いていた。そして、何よりもやさしいおばあちゃん（よ志 ちなみに祖父は與四郎、第2代目襲名、通称金さん、弟は銀さん）が待っていた。



恒例だったお正月の集合写真

なにせ、『丸與は三重県で一番古いパン屋』というのが我々孫一同の誇りであつた上に、店内には売り物のパン、和菓子、駄菓子類が所狭しと並べられ、裏の工場へ行くと、職人が大きな釜で小豆餡を作っており、「若鮎」の製作コーナーの下には「水飴」がブリキ缶一杯に在るという環境である。子供にはコタえられない天国であつた。その上、井村家は10人の兄弟を抱える大家族でもあつたから、若い叔父さん・叔母さんが、ほとんど兄・姉のようにおちびさんの面倒を見てくれたのである。特に、夏休みなどは数多くの従兄弟達が集まる一大集会場とは相成つた。それ故、子供心にも、陰気な坂川家とは『なんという違いだろうか』と思わざるを得ない訳である。

何故、伊勢に三重県で一番早いパン屋が誕生したかといえ、その鍵は海軍にある。当時、海軍の艦艇は鳥羽に入港し、伊勢神宮に参拝するのが慣わしであつた。寄港地の鳥羽で水と食料を調達する訳であるが、この時、軍艦の中では英国に習ってパン食がされていた。今考えると、これはビタミンB群の不足をパンで補っていたのである。これをビジネス・チャンスとして考えた曾祖父がせんべい屋（私の聞き違いでうどん屋さんだったかもしれない...）からパン屋に商売換えをしたということらしい。ちなみに祖父も三重県のパン製造業の組合長をやっていた。

もともと、教育と家計を妻が引き受けていることの多い日本国では、女系文化がわが国の伝統と言えるのではないかと思える。父は私の幼いとき既に鋳物の技術者として独立していたが、母が仕事の電話の対応に出る様子を聞きながら私は育ったといえる。両親とも商人の家に生まれたという環境が、私の性格に大きな影響をもたらしたのは当然として、根底には『丸與』というか、よ志おばあちゃんの生家、安岡家の血筋が色濃く私の中を流れているように思える。安岡家は北畠氏に仕えた武家の出で、家老職を務めていたとのことであるが、何代か前までは羽振りの良い名家であったようだ。母の話では『三代かけて家を潰した』とのことであるが、私の知っている範囲では既に「普通の農家」にはなっていたものの、祖母や姉・喜美（きみ、通称；神戸の伯母さん）の凜とした佇まいは、この安岡家の血統なのであろう。また、「神戸の伯母さん」のご主人（中西 雄）は、父の神戸大学の恩師であり、母の行儀見習宅で、かつ、仲人でもあったから、安岡家の家風は直接的にも（名古屋）坂川家に影響を及ぼしている。ちなみに安岡家の道楽とは新聞社「神都新聞」の経営、政治への関心を含むらしい。《田島屋という呉服商であった》ともお聞きしています。



安岡家の記念写真



日赤病院に入院中の祖母



中山さんの結婚式の記念写真 真中後列が私の祖父・井村與四郎

母、弥寿子は大正10年弥生の3月8日に井村家の二女として生まれた。本当は3番目だったらしい。しかし二番目の女の子が早世して、二女となったとのこと。長女は尾鷲の伯母さん(きよ子)である。祖父は「3人目も、また女の子」ということで病院に面会にも来てくれなかったらしい。「あまり期待されていなかった」と母は後年こぼしていた。小さい時からお茶目な性格だったらしく、幾つかの武勇伝?が残っている。明野の航空学校の校長だった徳川好敏少将の官舎へのパン屋の出前を自ら買って出たり、鳥羽へ艦隊がきた時に見に行ったり・・・等々。女学校を出て、神戸の伯母さんのもとで行儀見習をしている時、神戸の水害に出会ったりしてもいる。勉強をするタイプでは無いが、本を読むのが大好きで、店番をサボって近所の本屋(有文堂)で立ち読みばかりしていたらしい。「勉強すれば一番になれるのに・・・」という先生(後に京都府知事を務めた蜷川氏の夫人になられた方の由)の言に「(ガリ勉してまで)一番になりたいと思いません!」と言い返したという逸話は何度も聞かされた話ではある。父が一番で高等工業を卒業したことに対する言い訳でもあるのだろうか。



母・弥寿子 見合い写真

3. 尾河の叔父さんと父方の親戚のこと

尾河の叔父さん(治助じすけ)は、名古屋市中村区太閤通りに海苔問屋(かね安と号していた)を営んでいたが、この叔父さんにいろいろな面でお世話をしてもらったというのが、後年、母の口から聞かされたことである。長男(幸正)の世話をめぐって夫婦喧嘩になり、実家に帰ってしまった母を口説きに父が来た時も、実は叔父さんが「おまえ一人で貰った嫁さんじゃないぞ」と父を叱ったらしいし、結婚して直ぐに東京へ行くようにと手配したのも、敗戦後、川越村高松から名古屋に引っ越す時、県営アパートをひそかに世話をしてくれたのも、その引越しのトラックを準備してくれたのも叔父さんだったらしい。しかし、私が若い時の記憶は僅かである。叔父さんの奥さん(叔

母さん)の体格が良く、愛想が良かったという印象があるのと、尾河に勤めていた坂川敬八さん(七太郎の長男、坂川本家)の車庫への車の出し入れが子供心にも上手いなあ!と思ったこと程度である。尾河治助商店は後年阪神タイガースの掛布選手のキャラクターに引っ掛けた『かけふり』なる「海苔ふりかけ」を作り、販売していたが、叔父さんの没後、残念ながら以前の栄華は無い。治助さんは若い時は相当な放蕩息子だったそうで、多くの逸話を聞いているが、その苦勞ゆえに、とても人情厚い方であった様である。



創業者の尾河 治助が尾張名古屋の中村に大正十五年に創業した当時の写真

父方の親戚筋で関連しているのは伊勢乾物株式会社(かねやすと号す・・・尾河は暖簾分け?)の笠井家と株式会社油米(あぶよね)の大西家があって、オペラ歌手の笠井幹夫さん((株)かねやす社長)は私のはとこにあたる方だが、かつて東海メールの定期演奏会でソリストをつとめていただいたこともある。クラシック音楽といえば、价雄(よしお)叔父さんがベートーヴェンの後期の弦楽四重奏を好んでいたと聞いたし、卓生も大学生時代はコール・メグに所属していたことがあるが、現時点では笠井さんと我々夫婦だけが一族での愛好家ということになる。

4. お世話になった井村家の叔父さん・叔母さんたち

叔父さんの中では、特に价雄(よしお)叔父さんには本当にお世話になった。夏休みで伊勢へ行くと、毎朝外宮(げくさんと呼んでいた)にお参りに連れていってくれ、我々餓鬼連のお相手をしてくれたものである。後年『君達は僕が育てたようなものだ』と威張られても、ぐうの音も出ない関係である。祖父母は价という字に、介護の「价』『人を助ける』という意味を込めて命名したそうであるが、その名の通り、人に優しく、自分に厳しい、素晴らしい人だった。しかし、我々ちびっこ連を連れてバスに乗る時、价雄(よしお)叔父さんは常に列の最後になって、早く席を取りたい(座りたい)我々を冷や冷やさせたことも、これまた事実である。

同じくひさ代叔母さんも一番年下ということで、そこそこ大きくなった頃まで、例えばダイハツの軽四輪バンの第一号ハイゼットで配達の際に横に乗せてもらったりして遊んでもらった。もっとも、このハイゼット、2サイクル混合ガソリンのちゃちなものだったので、マフラーが排気ガスの

オイルでしっかり詰まっていて、まるでパワーが無い。いくらアクセルをひいちゃんが吹かしても煙が上がるだけで一向に上手く動かないという困った覚えしか無いのだけど。



丸與 2 F 物干し場でのスナップ 价雄叔父さん、ひさ代叔母さんと坂川3兄弟



幸正@丸與裏の建物

乗せてもらったということで思い出したが、小さな頃の最高のアドベンチャーは、パン配達のアート三輪車に乗せてもらうことだった。私も、二見が浦や、久居駐屯地までの配達に同行させてもらったものである。しかし、あまりにこのゲームに「ちび達」の皆がフィーバーしたため、よ志おばあちゃんは『ドライブ禁止』を全員に言い渡したので、ある日、私はこっそり荷台に乗り込んで、十分丸與から離れた地点で這い出して運転手の店員を驚かせた。当時の助手席はむき出しの折りたたみ椅子で、勿論シートベルトなんてものは無かったから、60 kmも出せば、それはもう大変な振動と音とで（なにせ足元が丸見えの地面そのものだから・・・）怖いものって、しがみつかるのは同じく折りたたみの金属製の取っ手だけ。大変なものだったのである。祖母が禁止したのも理由があるのだ。帰ったとき、店は大騒ぎだったらしい。（怒られた店員のお兄さん、ごめんなさい・・・いまごろ遅いか・・・）

幼い時の思い出は、休みのたびに山田に行った時のバック姿でカッコ良く入線してくるC-11型タンク蒸気機関車（大曽根駅）伊勢神宮（外宮）の白石持ちという行事に参加したこと、国鉄の山田の駅に汽車を良く見に行ったりしたこと、よっちゃんの手塚治虫の漫画本に読み耽ったこと、夏の花火遊びと蚊帳の記憶、近くの学校の校庭で夕方、とんぼ捕りに興じたこと、水飴の缶から割り箸で一塊を取り出し、食紅を付けて練ったこと。付けすぎると苦いんですよ、これが・・・



大井川鉄道のC-11 こんな感じで大曽根に入って来たのです

5. 井村家の文化

話は変わるが、伊勢市は神宮のお膝元にあるだけに、独特の文化がある。例えば、天皇家について
の見方であるが、日本で一番偉いとされ、神格化されていた戦時中でも、唯一拝みに来るのが伊勢
神宮ということで、貴賤に対する考え方が当方、恐れ入るほどに自由・平等である。母などは戦時
中でも「見たら目が潰れるという人の気が知れない」と嘯いていたらしい。

あとひとつは祖母・母と続く一種のカリスマ性である。靈感と言った方が判りやすいのかもしれ
ない。一番有名な出来事は、戦時中の空襲の預言である。戦争末期、あちらこちらの都市に焼夷弾
が落とされ、いよいよ伊勢も危ないとなった時、こっくりさんという占いを祖母と母がペアを組ん
で行い、そのお告げは『伊勢は今晚焼けます』というものだった。「どうしたら八日市場町は焼け残
りますか」と聞くと『北から来る火を防げば良い』とのこと。消防団長だった祖父は早速準備をし
て、見事に町を守ったということである。このエピソードは何十回も母から聞いた。

見事に町は焼けずに残ったが、しかしこの空襲でいつ子叔母さんは顔面に焼夷弾の黄燐をあび、
母が水田に顔を押し付けて火を消したものの、大焼け度を負うという災難も同時に起こっている。
『公(おおやけ)』のことは教えてくれても、プライベートマターまでは神様は教えてくれないよう
だ。ああ、気の毒な「いつ子」叔母さん！

6. 戦後という時代の坂川家

戦争に負けて、就職先だった大日本帝国海軍が無くなり、父はしばらく伊勢から桑名へ溶接の仕
事をしに通っていた。日本が航空機製造を禁止されていたためである。仕事が忙しくなってきたた
め、桑名市の近くの三重県川越村字高松というところに一家は引っ越した。そのころ生まれたのが
私である。後年、両親と一緒に1回だけ高松を訪れたときの写真がある。片岡さんという家の近く
だったそうだが、現在の川越町は中部電力の税金でリッチになり、四日市市との合併を今も拒否し
ているという恵まれた町であり、変貌も激しいため、私はいざ住んでいた家の跡を(はっきりと
は)見ていない。母の言うには、当時、『井戸には蛇や蛙が住んでいた!』とのこと。弟が生まれた
すぐ後、一家は名古屋市へ移る。県営住宅への応募が、どういう訳か当たってしまったのである。
汲み取り式から水洗トイレへの大変化、ダストシュート完備、絵に描いたような近代アパートへの
変遷である。当然家賃は高く、父はぶつぶつ言っていたらしいが、例によって母が実力行使。私は2歳
だった。



現在の川越町



片岡さん宅

『航空機製造が再開される日には、きっとお呼びがかかる筈』と信じていた父だったが、残念ながらお呼びは無かった。取り敢えずは溶接の仕事で暮らしていたようだ。そうこうしているうちに、溶銑炉（キューボラ）の設計を頼まれるようになっていた。「幼い頃、風呂焚きをしていた経験が役に立った」と何回か聞いた。しかし、航空エンジンの知識が役立って、父は廃熱利用による熱風式キューボラの特許を取り、高効率かつ安定な製品を保証する坂川式熱風キューボラは全国に顧客を得た。『マツダ・ロータリーエンジンのケーシングは、高品質を要するため、皆、俺のキューボラでしか作れないんだ』と話していた父の誇らしげな顔は今も忘れられない。



昭和 26 年 日立深川工場にて

正吉



正吉 昭和 26 年 日立深川工場にて

それにしても、我が幼心にも坂川家は変わった家だった。まず、私の友達が家に来るのを喜ばなかった。父は夜中に仕事をしていたらしく、幼稚園、小学校の頃は、朝いつも寝ていたし、帰ってきても起きて仕事をしているのを見た覚えも無い。したがって、他人が遊びに来れる理由も無いのである。父の死後、初めて履歴書などを見る機会があったが、終戦後に小さな会社ではあるが取締役を経験している。しかし、すぐに辞めているところを見ると、サラリーマン生活は性に合わなかったのだろう。自分の好きなように行動できる自営業を選んだのである。とぼっちりを食らったのが子供達という訳で、幼い時に既にこんな日曜日の無いような家庭はいやだと思った覚えがあり、これが私の職業（サラリーマン）を選択する分岐点になった。

変な家の続きであるが、昨年、母が盲腸炎をこじらせて入院・手術をした時、看護婦さんが妙なことを聞く。『ご本人がB型とおっしゃっているんですが・・・』実はA B型だったのだそうだ。我々も母の84歳のこの時までB型と聞かされて育っていた。父、兄、弟がA B型、私と母がB型と信じていたが、これで私以外の4人が全てA B型という、日本では極めて珍しい家庭であることが判ってしまったのである！ ということは、この私はB O型ではなく極めて珍しい（と血液型人間学の創始者能見正比古がいうところの）B B型であることも判明してしまったということになる。

ちなみに、A B型と知らされた母曰く『私はB型が好きだったのに・・・』

県営アパートでの生活は、それなりに楽しかった。3 Fに住んでいたのだが、1 Fに建築家松本さんの一家がお住まいで、私はその家によく出入りして、もっぱら息子さん（忠明さん）の手塚治虫を読んでいた。勿論、我が家には漫画の類は一切なかったと記憶している。県営アパートでのエピソードは、父が風呂を無理矢理玄関奥に運び込み、ガスで沸かしたことに伴う酸欠事件、同じく父が作ったグライダー模型が、朝露のため、たった1回のフライトでビリビリになってしまっただけでなかったこと、試験放送中のテレビジョンを（セインチという小さな画面だったが）堪能したこと、屋上で風上げや自作真空管ポータブルラジオの感度確認をしたこと、生卵を机に立てて得意になっている父を見上げたこと、弟が感電し、椅子の上で動けなくなっているのを私が引っ張り降ろしたこと等々・・・特にTVの導入は画期的なことで、近所の人がよく見にきたものである。中日がはじめて杉下のフォークボールで全国優勝したのも私は自宅のTVで見たのである。実験放送時代のこととて、受像機には愛知県で57（？）番目とかの番号が貼ってあった。



アパートの屋上で風上げをしているの図



母が持っているのが自作真空管ポータブルラジオ



生卵を机に立ててご満悦の父



醒ヶ井養鱒場へ初めてのハイキング

父の新しい物好きはTVだけではない。電気冷蔵庫、電気洗濯機、真空掃除機、真空管式ポータブルラジオ等々、およそ家電製品は皆他家より導入が早かった。ただし、電気炊飯器の発明までは『ガス自動炊飯器』ではあったが。



県営アパート 745 号室が坂川家ニューハウジング



Oゲージ(32mm幅3線式模型鉄道)他、満艦飾の玩具

新しい物ついでに言うと、車関係では、ホンダの最初のヒット作、原動機付き自転車『カブ号』を購入し、清明山のアパートからはるばる桑名の鋳物屋さんまでこれで通っていた。このバイクもどきはよく故障し、ドライブの帰り、坂道を父と二人でとぼとぼとカブを押して帰ってきたという思い出もある。当時は混合ガソリンでもあり、休日はプラグを外し、油まみれのプラグをガスコンロの上にメザシよろしく並べて焼いて付着したタールや煤を取るのが日常の風景だった。

弟が感電した話をしたが、私も県営アパート時代に危ない出来事があった。台風で増水した裏のどぶ川についつい足を入れて、あっという間に川に引きずり込まれた事件である。ごく小さい頃(川越村時代)に溝に落ちて「かば(川)はまったん」と言って帰ってきたことがある由だが、この時は流石に命の危機だった。河童に足を引っ張られるとはこのような事を指しているのだろうが、それでも泥水の速い流れの中で、向こう岸(といってもたった4m位)の草を掴み、更に流され、もう一度こちら岸に来た所で悪童連の差し出した手に捉まって事無きを得たというのが、その顛末である。川越村時代にも、肺炎かなにかで死にかけたらしい。この時は、当時まだ珍しかった抗生物質(ペニシリンかスプレプトマイシンであろう)を近所の医者に打ってもらって助かった。この時、

医者が『打っても良いか』と何度も聞くのだが、我が子を助けてもらいたい一心の父は全く意味が判らなかったと後日笑っていた。つまり、『こんなぼろ家に住んでいるが、本当にお金は払ってもらえるのだろうか』と医者は念を押していたのだ。後年、立花さんの『臨死体験』を読んだ時、幼い頃のこの様子をおぼろげながら思い出し、あれは臨死体験だったのか……と思ったものである。

アパート時代、我々3人兄弟はもっぱらOゲージ(32mm幅、3線式模型鉄道)で遊んでいた。2両ある真鍮地肌のB電気機関車は、緩んだジョイントをものともせず、火花を出して吹っ飛んでいた。このうちの一両は价雄(よしお)叔父さんが中学か高校のころ作ったものだそうであり、まだ私の家に現存している。あとは、5円か10円で買った玩具のライダーを上手に飛ばすこと、そして父に連れられて、小牧空港の空港祭へ出掛けることや、大曽根まで歩いて本屋さんへ行くこと位が我々のホビーだった。そういえば小さな広場で、野球をしたり、臨時の屋外映画を見たり、テントでの移動教会に首を突っ込んだ……中央に赤い大きな蠟燭があった……のも懐かしい思い出である。



アパートのすぐそばの狭い広場が子供達の遊び場だった 既に兄がキャッチャーをやっている

野球といえば、兄の小学校時代、一番熱心だったのが少年野球で、応援のため、はるばる(でもないか)熱田球場まで母と応援に出掛けたものだ。残念ながら、名古屋市での大会で準優勝だったと思うが、キャッチャーとして活躍していた兄の姿は忘れられない。この時のコーチが夏目おじさんで、後日、次男の清二君と親しくなる。



名古屋市少年野球 千種区大会で優勝した上野小学校チーム 幸正



アパートの屋上、セルフタイマーでパチリ



小牧の飛行場へ カメラ小僧が私

7. マイホームへの引越しと父の外遊、そして伊勢湾台風

その県営アパートの3Fから引っ越したのは、多分小学校の4年生だったように覚えている。理由は、狭いアパート暮らしに加え、近所の奥さん同士の不仲のようだ。『おまえが佐野さんの奥さんと揉めなければ・・・』と父がぼやいていたことを後年、母が面白おかしく回顧していたが、何時ものように母が行動をおこしたのである。初めて自分が建てた千種区赤坂町の平屋のその家には、大学4年まで住む事になったのだが、移り住んだ当時はまだ道路も砂利道（未舗装）で、玄関の引き戸にはめ込まれているガラスが車のはねた砂利で割れた、そんな時代だった。引っ越してすぐ、父がヴィクタ - のモノラル電蓄を購入したので、母は子供を連れて早速レコード店に出掛けた。その今池の名曲堂で私は初めてレコードなるものに出会った。高英夫のシャンソンだった。今池名曲堂の風景と、この電蓄を置いた当時の応接間と、高英夫の歌声とを、今でも私はまざまざと目前に浮かべ、聴く事が出来る、それ位ショッキングな出来事だったのである。ラジオから流れてくる音楽がレコード再製によるものであることを理解したのその時からである。それまでは、この音楽は、スタジオで一息懸命生放送のため人が汗を流しているものと思い込んでいた。



赤坂町の土地を下見に行った時の貴重な写真



赤坂公園、まだ桜を植えたばかりの頃

もともと、若かりし頃、駐在武官として外国に行くことが夢だった父は、ようやく仕事が軌道に乗り始めたこの時期、当時のお金で家が一軒建てられるほどの予算を使って、ヨーロッパへ鋳物技術の視察旅行に出掛けた。まずは当時唯一の教材だったリングフォンというレコードを買いこみ、ヴィクターの電蓄で英語の独学にせさせと励んだ後、S A S（スカンジナビア航空）の最新型機ダグラスDC-7Cに乗って、北極周りでドイツ・イギリス・フランス・イタリア・スウェーデン・スイスを廻り、インド周りで帰国したのだが、途中イギリスの百貨店で3線式のHOゲージモデルを求めてきたのである。1958年9月、狩野川台風の襲ってきた丁度その時であった。これが元となって、しばらくの間、坂川家では鉄道模型熱がはびこる結果となった。父は大工さんに頼んで、HOゲージの小型レイアウトのベースを作ってもらい、つぼみ堂のBタンクと貨車は、今は建てなおされていない和式の客間で、その軽快なモーター音を響かせた。いわゆるお座敷運転である。丁度このころSONYの前身、東京通信工業の作成したモノラルテープレコーダーでこの走行音を録音して喜んでいて自分自身を今は懐かしく思い出すのみである。しかし、父をはじめ、兄も弟もこのフィーバーはいつしか収まっていった。この悪性病原菌は私にだけ住み付くという結果になったのである。ただし父は後年、ライブスティーム（実際に蒸気で動く模型機関車）という形で、この病が再発するのであるが。



木曾駒ヶ岳のふもとと駒の湯で家族サービス



上；ブリュッセル 下；ユングフラウヨッホにて

翌1959年、私が小学校6年の9月26日未明、かの悪名高い伊勢湾台風が名古屋市を襲った。大きい台風ということで、学校から帰ると、物置のガラス窓にベニヤを打ちつけていた私達をみて、理髪店に行ってきた父は『学校にはやっておくものだ』と、まことにのんびり至極の印象を母に語ったという。しかし、その夜の風はものすごく、父は畳を上げて、ガラス窓の内側に当て、物干し竿をつっかい棒にして風圧に対抗した。私も、南側のガラス戸を必至で押さえた。風が巻くと、そのガラス戸が手前に撓むのである。本当に怖かった。勿論雨漏りは激しく、暗い室内に用意した洗面器等に雨の落ちる音があちこちでしていた。



台風一過・晴天のもと...テラスの残骸は片付けた後でしょうか？ 濡れた畳を干しています

翌朝、台風一過の青空のもと、雨戸を開けてみると、新築間もない坂川家の被害は甚大で、テラスは吹っ飛び、塀は倒壊し、犬小屋は隣家の倒壊した塀の下敷き、てっきり死んでしまったと思った愛犬（チビ）が、庭木との僅かな隙間に鎖が引っかかって、クンクン鳴いていた。このチビは、坂川家が飼った最初の犬で、そのはじめは、我々が通った上野幼稚園の炊事場の味噌を舐めていて捕まえられ、弟がもってきた雑種だった。飼い主にはこの上なく従順で、嫌がらせに口の中に指を突っ込んでも、けっしてじゃれ付いて噛むようなことが無かったが、神経質で時折他人を噛み、問題を起こした。きっと、小さい時、ずいぶん他の子供にいじめられたのだろう。学校から帰って来ると、チビはその足音を聞き分けて、晩年まで決して飼い主に吠えることが無かった。たった一度だけ間違えたことがあったが、私の姿を見て、巣穴（雨戸の戸袋の下の土を掘って入りこんでいた穴）にもぐりこみ、どんなに呼びかけてもその日一日、チビは巣穴から出てこなかった。間違えたことがひどいショックだったのだろう。



ひろってきた当初のチビ



壮年時のチビと私

8. 車が来た！

『若い頃あこがれ、でも無理だろうなと思っていた。せめて、一生のうちに自分のバイクを持ちたいものだ...』と後年私に語った父であるが、八事に中部日本自動車学校をトヨタが設立したのを知って、母に無理矢理？免許をとらせたのが多分私が東海中学の3年生の頃。母が免許を取得したその日、父はトヨペット・クラウン59年式スタンダードの中古車を丸一自動車から買ってきた。当時、日本国中にクライアントを持ち、しょっちゅう出張していた父は、母をお抱え運転手にして、夜討ち朝駆けの国鉄始発駅までの送迎を期待していたようだが、実にその日から、我が家は一変した。お嬢さん育ちでありながら、男の子3人をかかえ、自由の全く効かないことで不満だった母は、これ以降、好きな時に好きなところへ出掛けるという自由度を手に入れ、同じくドライブ大好きな父とのファミリードライブが我が家の最大のレジャーになった。時は未だ大衆車時代ではなかったから(カローラの発売は私の大学入学と同時である！)道路は未整備で、いたるところに砂利道と、工事中のマークだらけの国道、県道、市道、町道、村道(それぞれ酷動、険道、死道、懲道、損道と揶揄されていた)があふれていた。しかも一歩奥に入ると、真昼でも1時間に3台しか通らないような道がほとんど。おおらかな時代ではあった。3人の男の子をかかえ、わき目も振らずに働いてきた父の戦後がここに終結、やっと楽しい坂川家が始まったのである。



日本平へドライブに出掛けた時の写真 既に時代はパブリカ・ニュークラウンの世代へ



アパート東隣の住宅の公園での兄 後ろは三菱の配水タンク



尾鷲のいことと共に



後方は三菱の大幸エンジン工場 今は名古屋ドーム



アパートの裏は崖 その下には私のはまったどぶ川が...



まもちゃんと一緒に 後ろはクリスマス・ツリー



小牧飛行場の航空祭にて



今も燈籠は変っていない天満宮



東山動物園でのスナッフ